



## 刊行にあたって

日本は超高齢化社会を迎え、健康寿命を延ばすのと同時に、あたたかい心をもった健全な次世代を育成することがとても大切なことです。核家族化が進み、育児情報が溢れているのに、実感がわかず悩むお母様方も増えています。子どもにとって遊びは学ぶことであり、ちょっとした失敗は、温かく見守る人の存在下では貴重な学習の機会でもあります。

生まれたばかりには、一見、眠ること、お乳をのむこと、泣くこと、四肢を不規則に動かすことくらいしかできないようにみえた児が、発育・発達、成長し、希望を抱き、今この本を手にとっておられる貴方のように、自信に満ちしなやかに行動し、語り、心を表現し、優しさで周りの人々を包めるようになります。ご自身の子どもの頃のことを覚えておいででしょうか？周りの方のちょっとした優しさがとても嬉しかったことや、頭ごなしに否定されて悔しかったことなど。。。様々な経験がきっとおありだったと思います。

子どもたちは、保護者、保育機関、学校、地域や交通機関の方々との関わりなど、環境にも依存しながら日々変化しています。核家族化や女性の就労増加からも、保育園や幼稚園での生活が、お子さんにとっても大きな影響を与えます。子どもの脳には健康でも病気で、脆弱性と無限の可能性が共に備わっています。そのお子さんなりの可能性をできるだけ活かし大切に育むことができれば、素晴らしいと思います。私たち大人も子どもの頃に大人に支えられて育まれてきましたし、時には傷ついたこともあるでしょう。子どもを傷つけないようにするためにも、あなたの目の前のお子さんの状態を十分把握し、その良さを見つめ、向き合う必要があります。

本書では、子どもの保健として発育・発達、健康状態の把握、子どもの疾病の予防および適切な対応、子どもの健康と安全として、保育環境、安全管理の実際、体調不良に対する適切な対策、感染症対策、保育における保健的対応、安全管理の実施体制、病気についても詳述しています。また最近増加していると思われる発達障害(含予備軍)の子どもたちとの具体的な対応方法も述べられているので、子育て孫育てをする皆様、保育に携わろうとする方々のみならず、看護師、学校の先生、養護教諭、学校カウンセラー、保健所の保健師、交通機関職種などを目指す方々など子どもを取り巻く皆様に必ずお役に立つと思います。子どもたちの視機能、聴覚、運動機能、精神機能の発達をみて、遅れが認められている場合には、疾病の有無を検討するだけでなく育児環境など広い視野で評価し育児支援的介入が必要です。慢性の疾患を持つお子さんでは、医師のみならず保育園や学校で子どもに関わってくださる方々の理解、配慮や優しさ、励ましが必要で、本書が、子どもに向き合う皆様の危機管理、計画立案、保育環境、学校生活充実のためお役に立つものとなることを願ってやみません。

東京女子医科大学 名誉教授 大澤 真木子

